

表象としての「町並み」(2)

吉原卓男

数年来、伝統的町並みにおける環境デザインの地域性・独自性に関わる調査研究を塚本学院教育研究補助費により進めてきた。報告は藝術 28 “表象としての「町並み」” に続いてのものである。前回同様、幾つかの伝統的町並みを踏査した。そして、伝統的都市環境に見ることのできる「普遍性」と「固有性」の闘(せめ)ぎ合いの中での美意識と、自然との共生による伝統的町並みにおける環境と造形にかかわる幾つかの異なる視点からの考察とその報告である。

調査の概要

調査の手法は、前回の報告と同様に集落及び町並みを、部分的・計量的な視点で拘るのではなく、それを構成する諸要素(道路・建築・敷地・及び周辺の空間、更に自然環境)を視覚的に捉え全体的な相互関係を把握しながらその形態と特徴の収集を進めた。

報告の対象となる集落及び町並みは、前回の踏査に加えて、新たに、現地に於いて私自身の視点でおこなったものである。現地での踏査による情報収集に平行し、予備的な収集(文献及びインターネットによる検索等)による資料の充実と、既知の情報を現地にて視認、情報化の過程で省略・取捨されたものを、私自身の視点に基づき整理し前回同様に末尾に資料として付加した。

視点

伝統的集落及び町並みに見ることのできる「普遍性」と「固有性」の闘ぎ合いの中で成立している美意識と、

自然との共生による造形の手法は一様ではない。しかし、時を重ねてあり続けた伝統的集落及び町並みには人々の共感なくしてはあり得ない環境表現とデザインの手法がある。そのすべてを踏査したわけでもなく、限られたサンプルではあるが、環境把握とその幾つかの環境デザインの類型とその手法を概観する。

対象とした伝統的集落と町並みの多くに、自然発生的な集落から、意図的に街道筋へ近在から集められた“農”を専らとする家屋による家並み、半農半商の在郷の商家や旅籠による町筋、さらに多様な権力の介在による両側町による町場化など、成長の各段階的過程を概観することが出来た。

また、成長過程の屋敷地とその家屋配置を概観すると、その多くを“農”を生業とする“かたち”を始源としている。それらの“かたち”の変化の経緯は、他と連なることなく個として独立した姿から、次第に進む町場化に伴い、やがては家並が櫛比する連続した景観へと段階的な変化を示しながら、京風或いは江戸風と呼ばれる普遍的形態を目指すこととなる。

この変化には幾つかの空間的・形態的特徴がみられる。始源の“かたち”は、主として居住部分の建物と、“農”の生産支援に関わる作業空間と生活のユーティリティ空間である“にわ”などからなる私的領域部分によって構成される。始源の“かたち”は、町場化によってしだいに機能分化と空間の分節をもたらし、私的領域と、これに接する公的領域との境界領域に顕著な類型的形態を示す。

この境界領域の類型的な形態と段階的な変化が景観の「普遍的」・「固有的」なイメージを形成し地域特性を形成する。視線の行方がデザインを決める。報告で

はこの境界領域の“かたち”に注目した。

1 - 多中心（富山県砺波平野散居村）



砺波平野・散居村

稲作のための空間支配（水田）の構図での屋敷分布（散居）で、水系を中心にした広がりや秩序を持つ“かたち”である。視覚的に公私の境界領域を明確に区別する必要もなく、私的な空間意識の同心円の広がりの中でおのずと領域を形成している。営（稲作）みの機能を具備した領域で中心の屋敷が東向きに配置され、その外縁（砺波においては南側）には水田形成時に残された自然林が屋敷林を形成し平地に独居した家屋を風威（南風）から守り、往時の森の姿を僅かにとどめている。

2 - 環状集落（新潟県高柳町萩の島）



前田中央より西方を望む

中門造りの民家

萩の島は、越後の国境鯖石川の河岸段丘高台（標高約80m）の小盆地に位置し背後の山林に守られた縄文の面影を伝える環状集落である。清水の出る上村から山崎へ、南側から下村、沖村へと、細い外周道路とともにエガワと呼ばれる水路が環状に敷設されている。外周道路に沿った茅葺き農家（多くは中門造り）敷地のニワには「タネ」と呼ばれる溜め池が掘られ、エガ

ワから注水される。ここは、野菜を洗ったり、農具や手足も洗ったりする場所で、鯉を飼ったりもする。さらにニワには「マエデ」と呼ばれるマメオトシの作業をおこなったり、野菜や山菜などの干し物をおこなったり、洗濯などのためのユーティリティ空間がある。環状の構図は外敵から中央の前田と呼ばれる水田を守るかたちである。外周道路への視線は建物と「タネ」・「マエデ」周辺に植えられた樹木配置によって適度に遮られ、前田に対する視界の確保とは対照的である。集落の入り口（北東）には鎮守の社が配されて集落の境界域を形成している。現在、私的領域が環状に在ることが村人にとっての公であり、マエデとタネ（私領域）と共にエガワ（公領域）の維持や、前田の水田（私領域）の継続が水系に秩序付けられた環状の景観を守る。

3 - 道筋から町筋へ

伝統的家並みからなる集落の多くは、一筋の道に沿って配置された屋敷地を始源の“かたち”としてさまざまな変化の要件を得て段階的に屋敷地が接する町筋へと変化していったものと推測される。そして、町場化に伴う人々のまなざしと、道の町筋への変化が、私的領域の分節を進め、公的領域との境界領域の形質の変化をもたらした。結果、町並みは環境心理的な働きとそのデザイン行為による多くの造形を獲得していったと考えることができる。

ニワからトオリニワへ



在原

大原宿

左の写真、在原（滋賀県マキノ町）の集落は、福井

との県境の山地、西に開けた小盆地中央部を西流する八王子川の河岸段丘北側高台の東西の道路に沿って、中心地区を形成している。屋敷地の多くは、集落の中心道路に面している。主屋と道路との間には‘ニワ’が配されている。‘ニワ’に向かって、座敷と屋内の土間に通じる入り口が接している。座敷の前には控えめな生け垣による塀と低い木立が僅かに表よりの視線を遮る。表構えの表情には、村中道路に面しながらも、何のてらいも警戒心も無く、村に異邦の人の訪れを埒外とする気のおけない開放的で素朴な表情を残す。“むら”領域での“個”の境界領域の曖昧さをのこす“かたち”でもある。

右の写真は因幡街道大原宿(岡山県大原町)の屋敷地で、本陣を持つ街道の宿場町である。主要街道の宿場は“私”の表情を控えるのが常である。しかし、大原宿では、在原と同様に街道との間に私領域である‘にわ’が設けられ、屋敷地裏に水田や畑地が展開する半農の在郷商家で農家の表情を強く残す。

‘にわ’に面する主屋の表情は、屋内の土間に通じる常の領域の出入口と、式台を持つ格式張った非日常的な玄関。街道側に位置する表座敷の前は築地塀による囲われた庭で外部から伺い知れない閉鎖的配置。平入り瓦葺き、二階建て厨子造り虫籠窓、海鼠壁の格式張った表構え。等々の仕掛けによって、街道の格に対応した晴れから曇へのスイッチし易いフォーマルな背景をつくりだしている。



大内宿

大内宿(福島県下郷町)は会津藩主の参勤交代にも利用された会津西街道の宿場町で、南斜面を下る街道に面した短冊形の屋敷地からなる町並みである。屋敷地と街道の境界には、街道に平行して二筋の水路が流

れ、寄棟あるいは袴腰の切妻造り茅葺きの家屋が妻入りの表構えで街道に接している。建物以外に私領域を示す境界はない。街道に面した二室の客室と街道脇の水路との間には2~3間程度の何もない“オモテニワ”が設けられ、街道との間には特別な障りとなるものもない。

街道を挟んで両側の旅籠の客室が一体となって宿場空間を演出している様は、現在、観光地化した大内において、宿場時代と同様に、街道に面した二部屋が土産物など商う「ミセ」と変わっても、その旅人による賑わいの宿場空間の構造はさほど異なるものではない。敷地南に位置する隣家との間の空地は、桁行き方向に私領域が深まる構造で家人の通路として使用されている。奥行き方向中程に土間を伴う入口が設けられ、土間を挟んで表と裏とに仕切られている。

この通路的私空間は、京都などの“トオリニワ”的なサービス空間としての意味は同様で、異なるのは露天構造で「オモテニワ」と同様の普通の土のままである。

この“トオリニワ”的なサービス空間は、表構えは異なるが、次に紹介する村田及び陸前高田今泉のそれと同じである。



村田



今泉

村田(宮城県柴田郡村田町)は紅花で財を築いた商人達の店蔵(江戸末期から大正にかけて建築)による伝統的町並みである。南北の直線街路の両側には、間口が狭く奥行きの深い短冊形の屋敷地がほとんどを占める。表は、店蔵・袖蔵と立派な門(南側)による重厚で豪華な構えは扱ひ商品よるのであろうか。門から通じる通路は、大内宿と異なり床は石で舗装され奥(ニワ)に通じる。通路は、家人が出入りする主屋への出入口、土蔵棟への搬入路として利用され、商品出荷

や梱包などの作業空間が奥（ニワ）に確保されている。通りに面した建物の一階全部を店舗として使用する一方で、立派な門を境界として私領域を厳然と仕切っているが、空間構成は分化・分節されない“農”型の空間表現とみるべきか、トオリニワへの進化の前兆とみるべきか微妙である。



村田・店蔵

今泉（岩手県陸前高田市気仙町）は、他の街道筋の宿場町と同様の間口狭く奥行き深い短冊形の敷地形状である。前面は“ミセ”部分で間口を最大限に確保し、建物の東側に二階が半間ほどせり出した下に通路を設け主屋への入口のある奥に導く。奥に達すると東側に通路部分より幅を広げた“ニワ”（私領域）を確保している構造である。奥の私領域の採光と通風を確保する構造は村田とよく似た構造であるが、その表構えはインフォーマルなものとなっている。



京都嵯峨鳥居本

市場庄

嵯峨鳥居本（京都市左京区）は愛宕山詣での門前町。街道沿いには茶店などが立ち並び、京町家の並びと農村的な景観が共存する。写真の家屋は農家である。在原や大原宿のように“ニワ”を街道に面して開放し、私領域を多くの参詣者に露出する“農”型の表情を持たない。更に家並みを途絶えさせることのないよう配慮した、中門造りと塀の組合せ、街道への視線は愛宕山や念仏寺への敬意と畏れが造りあげた町並みの“かたち”といえよう。

同様に伊勢街道に面した市場庄宿（三重県三雲町）は、かつてはお伊勢参りの人々に旅のさまざまなものを商う一方で農業もこなす半農半商の町並みであった。写真は道路南からの撮影である。主屋の表構えは切妻の妻入り、せいがい庇とその下の幕板、主屋の南側には、潜り戸が建て付けられ瓦葺きの板塀が町並みの連続感と通りの緊張感を演出する。板塀の内側には“ソトニワ”が附設され農具や収穫物の蔵が“ソトニワ”に面している。主屋の表側“ミセ”が街道に面し、ミセに接する入口は土間、屋内の最奥部のカッテに通じる“トオリニワ”で、中程で南側の“ソトニワ”と結ばれる。お伊勢さんへの敬意が私領域を包み込む“かたち”でもある。

裏筋

囲いが強固な版築の坊牆（ぼうしょう）であっても、線引きであっても一旦囲われればきわめて私的である。これは随・唐の長安に遡る東洋の空間認識といえる。囲いの外側は権威的な公の領域を示し、内は極めて私的な領域を示す。街道と集落が成長していく過程での、境界形質の変化の様態をみた。町筋の成長はやがて領域の分化と分節を促す。この項では、公的表情を強める表構えの街道筋から分化・分節した私的な領域をみる。表街道では公的（地縁的な公）、動的な表情を示し、裏道においては私的（地縁的な私）、静的な表情を持つ。それぞれの個性と形質を知る。



吉良川・下町地区

吉良川・上町地区

吉良川（高知県室戸市）の集落は、海岸に近い下町地区と、山側の微高地に展開する上町地区からなる在郷町である。下町地区の町並みは南北に貫く室戸街道

両側の短冊型の屋敷地で形成されている。土佐漆喰仕上げで水切り瓦を多用した外壁の町屋が連続する在郷商家街を背景にした街道はフォーマルな表情をつくり出す。一方、上町地区の敷地割りは農家型の方形で、細い街路と石垣を周囲に巡らした極めて閉鎖的で私的な環境を形成している。石垣は玉石や半割りの割石を積み上げて作られた「いしぐろ」と呼ばれる伝統的な素材で固有の景観をつくり出している。しかし、備長炭の産出地としての役割を終えた吉良川の町並みは、その境界領域の緊張が崩れ、内からの私的な思いの表出に翻弄されているさまは悲しい。



茂田井宿



奈良井宿

写真左は、蓼科山の北麓、鹿曲（かくま）川に注ぐ芦田川下流右岸に位置する茂田井宿（長野県北佐久郡立科町）である。中山道芦田宿と望月宿の間であって両宿の補助的な役割を担う「間の宿（あいのしゅく）」であった。宿泊することはない休息のための宿で、いわゆる宿場町とは異なる、武家屋敷を思わせる豪壮で人を寄せ付けない門構えと白壁造り・土壁の屋敷と太めの格子をはめ込んだ開口部の表構えで街道の背景を彩る。この宿の境界域の表情は、同じ中山道の宿場、奈良井宿とは異なり、旅人を意識した商人達ではなく、旅人に关心の薄い豪農を中心とした人々であることをかたちで明らかにしているようでもある。

4 - 町筋の仕掛け

境界域に表からの権威と内からの欲望の闘（せめ）ぎ合いの中から、“みち”を単なる移動空間から“まち”場の屋外生活を豊かなものへと導くさまざまな環境デザインの“かたち”をうみだしてきた。

“まちば”の成立は町並みを成長させ、その意味を深めた。町並みの“並み”つまりそれは標準であり、繰り返し連なる波でもある。そしてそこには、突出することを嫌い目立つことを‘やぼ’といい、さりげなきのなかに‘いき’をみつけ工夫を重ね伝統を深めた日本の環境デザインがある。それはまなごしに耐え新たなまなごしを導く。公的領域への私的な欲望の表出・関与には幾つかの類型が見いだされる。

栈敷窓



栈敷



日野・栈敷窓

滋賀県は日野の綿向神社の春の祭りはでいくつもの曳山が町に繰り出される。その曳山を座敷の内や前裁に仮設された栈敷に親戚縁者が集まり宴を催しながら、板塀に設けられた栈敷窓（さじきまど）を通して見物する。表通りからは、板塀に緋毛氈や御簾で彩られた栈敷窓越しにうかがえる座敷の御馳走の山と、室内の室礼（しつらえ）が祭り空間に奥行きを与える。日常は板塀に囲まれた私領域が、祭りの一日、表座敷の室礼に止まらず食事風景や御馳走までもが表通りを彩るものとなる。表に面した玄関の脇には清めの水桶が用意され私的な空間が祭りの空間へと変化する。

雁木

雁木は、津軽地方では「こみせ」、山形では「コマヤ」、新潟内陸部では「トンボ」、上越地方では「雁木」山陰では「仮屋」と呼ばれ、人々に親しまれた私領域に組み込まれた生活共用空間で、住宅や店舗の軒の外側に雨の日、冬の吹雪や夏の日照りから歩行者を守りなが

ら快適に街歩きや買い物ができるよう、藩政時代に考案された、本格的な木造のアーケードである。津軽地方から山陰地方の日本海側にかけての積雪地帯の各地でその例を見いだすことの出来る、公私領域における境界域の優れた日本の環境デザインといえよう。



黒石 こみせ通り

黒石の「こみせ」（青森県黒石市中町）は軒先一間を一間間隔の柱割りで連続する回廊で一間の通路幅は人が荷物を持って楽にすれ違うことが出来る程良い幅である。「こみせ」が建物と一体となり快適な歩行者空間を作り出している様子はイタリア中世都市のボローニヤのポルティコと同じである。一間間隔の柱割りを持つ庇の回廊と棟高の低い切妻屋根、白漆喰の真壁構造による統一された私領域による端正な景観は他に類をみないパブリックな表情をつくり出している。



ウチニワの樹木が際だつ弘前・石場家住宅

弘前城下の石場家住宅は江戸後期の建設。建物は正面15間半、奥行22間の広大な屋敷地の西南隅に建てられ、間口9間の入母屋造、柂葺、妻入で軒先半間を一間間隔の柱割りで連続する回廊。黒石の「こみせ」に比べてやや狭い回廊幅ではあるが通り全体を秩序立てる優れた景観をつくり出している。

黒石、弘前、直江津、若桜に共通してみられる特徴は、屋敷地が方形で間口が広い、従って一戸の建築に



回廊床が石張りの直江津の雁木

よる庇が幅広く占めることが出来るので、連続した空間秩序の形成が容易である。また、内包された「ニワ」の樹木がそのシーケンスを彩りあるものとしている。



若桜宿

若桜（わかさ・鳥取県八頭郡若桜町）は鳥取と姫路を結んでいた若桜街道と氷ノ山を越える伊勢道の宿場町である。切妻平入り主屋の通りに面した庇下に組み込まれた1.2m程度の雁木「仮屋」構造の町家による家並がその特徴である。隣家との通り抜けができない私領域による境界域は、黒石や直江津の例とは公領域への連続感において異なるものである。「仮屋」の町家は近年の大火以来その数も減少した。

ミセ造り（ばったり＝ぶっちょう）

「蔀帳（ぶっちょう）」による軒下の造作は、私的なおもいが境界をはみ出し外部に露出した“かたち”である。農家の作業・ユーティリティ空間である“ニワ”的な空間が漁村において建築に附設され装置化され「蔀帳」となったといえる。これは、上部は蔀戸、下の縁台で「ばったり」と呼ばれる平安時代の寝殿造りの揚げ蔀戸を原形とする外壁に収納することができる上下二枚の板戸のことである。海産物の乾燥や販売、漁具の修理

や日向ぼっこ、夕涼みなどの場として日常の気のおけない隣近所との交わりの生活空間へ発展していく装置でもある。かつては太平洋岸の漁村に広く分布していたと資料にあるが、踏査において確認できたのは徳島県の牟岐町中村や出羽島、東洋町甲浦および高知県室戸市の吉良川である。



出羽島のぶっちょう造り

海部郡牟岐町の南東3.7Kmの海上に浮かぶ出羽島は面積0.5km²の小島である。ここでは多くの「ぶっちょう造り」がみられる。港から通じる4m前後の通りに面した住戸に連続して施設され、人口200人たらずの小さな漁村コミュニティで、公領域である小路が障害となる車や自転車に邪魔されることなく「ぶっちょう造り」によって私領域と一体化している様子がうかがえる。



高知県安芸郡東洋町甲浦のぶっちょう造り

甲浦の「ぶっちょう造り」は前面の道路がおよそ12m前後と出羽島のそれよりはるかに広い幅員で、前の家と非常に近い距離感によって造りあげられた界限性はここではみられない。ただ出羽島(1.2m前後)より深い(1.5m前後)軒の出と前面道路に比して低い棟高が逆に軒下の「ぶっちょう造り」による私領域の色合いを濃くしている。

格子

格子はおもて(公領域)の気配を視覚的に捉え、うち(私領域)の「かまえ」と「まなざし」をデザイン化したものでもある。構造的には敷居や鴨居など建築に組み込まれたものから、時代が下がるに従って京格子のように取り外し可能な建具と変化する。機能的には、防犯、眺望、採光、換気の役割を担う。

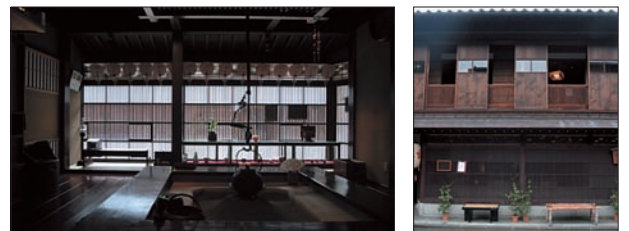


奈良・斑鳩町龍田の町並み

龍田は、奈良街道沿いの油を商う商家の連なる在郷集落で、その表構えは伝統的な、大和棟或いは棧瓦葺き・切妻造り・厨子造り・平入りの様式による町並みである。写真の格子は、直径90mm程の丸太を並べ、中程に一段、板材による貫で繋いだだけのシンプルな構成で大敷居から鴨居に組み込まれた荒格子である。

奈良には奈良格子と呼ばれる、丸太を等間隔に並べただけの古い様式の素朴な格子がある。丸太による格子は、間隔が広く粗いため、昼間でも外から暗くて見えづらい内部を伺い知ることができる。このデザインは、いかにも防御を主たる目的とする始源の構えを意図する。が、一方で丸太を使用する奈良格子は鹿の角を傷つけないようにと、鹿格子とも呼ばれるこの地方独特の配慮によるものとの説もある。

写真は金沢東山の茶屋の格子である。弁柄塗りの出格子で、「キムスコ(木虫籠)」と呼ばれる細かい本格子が特徴。見付け14mmで透かし6mmはいかにも繊細



金沢・東山茶屋町

な細工で木虫籠の名が示すとおりである。断面が外側の広い台形になっていて、外からは見えにくく、内からは格子越しに和らいだ光と共に道行く人の姿を捉えることができる。道行く人はそれを意識した凛々しさが欲求される。格子としては明らかに表へのまなざしが主で、防衛的役割は在るかなしといってもよい、いかにも（私領域）の“かまえ”と“まなざし”をデザイン化した“かたち”である。

写真は格子窓が並ぶ広島竹原の町並みである。一階



広島・竹原

部分に多い「出格子」には、縦格子の中に横格子を加えた意匠（竹原格子）が特徴である。横格子の見附は25mm程度で21mmの透かし、横格子は45°回転させた25×25の部材を12mm程度の透かしを確保しながら並べられている。このデザインは、明らかに屋内側からの道行く人を追尾する視線を捉えた構造のように見受けられる。金沢のキムスコのように雅のなかに鋭さ秘めた表現ではなく、明らかな内側からの視界確保と防衛の直接的な構造である。

寺社及び祠

集落の成立及びその形態と寺社が関わりを持つことは既知のことである。ここではその成立に言及するのではなく、伝統的集落及び町並みにおける寺社及び祠の配置には環境表現の結果としてのデザインが存在することに注目し、その環境デザインの意味を概観する。

それは、景観支配を通じて、住民と訪れる人々に対する秩序支配を意図する構図である。

嵯峨一の鳥居の町並みは、主に江戸時代末期から明



嵯峨鳥居本



竹原の胡堂

治・大正にかけての建物が、愛宕街道に沿って建ち並び周囲の美しい自然景観と一体となっている。建造物の様式は、化野念佛寺を境にして地区分けることができる。愛宕神社一の鳥居に近い上地区は茅葺きの農家風の建物が多く、下地区では格子のある厨子造りの京町家風の建物が目立つ。抑制された景観は、愛宕社あるいは念仏寺の領域に在ることの高ぶり、あるいは参詣者のまなざし（公）に対する恐れと自尊（私）がいまの景観の“かたち”を生み持続させているのであろう。

竹原の伝統的町並みは、南北に抜ける本町通りに面した両側町を中心とする。通りは両端で直角に折れ曲り北端に胡堂、南には地藏堂により境界域が形成されている。港町、塩田町を景観的にも生業としても支配していたのは商売の胡堂、塩浜の守護としての地藏堂であった。そして、その支配力の衰えは景観の破綻の兆しにみることができる。

むすび

前回に引き続いて、伝統的集落と町並みに現れる空間の境界域に関わる表現について幾つかの環境デザインとその類型の“かたち”について概観を進めた。環境把握の長い歴史を考えると未だ前段階的な部分での対応に終始しているようである。引き続いて進めたいと考えている自然との共生の“かたち”についても、あるいは「普遍性」と「固有性」の闘（せめ）ぎ合いの“かたち”についても、紙幅を考えると触れること少なく終えざるを得ない。これらについても、次回以降に調査をまとめ報告の機会を持ちたいと考えている。

新潟県	荻の島		位置 高柳町荻の島……越後の国境、鮎石川の河岸段丘の高台（標高約80m）に形成された小盆地に位置。	町並（町家）の表構え	集落の家屋は茅葺き二階建ての中門造りが多数を占める。中門の二階部分が半間ほど迫り出した特徴のある構えは、降雪時の庇に変わる出入り口の空間確保からの形なのだろうか。一般的な外壁は板張りで妻側のみ真壁で漆喰の白が印象的。	町並みの特徴	萩の島集落は、山を背に細い道路とエガワと呼ばれる水路に沿って民家を環状に配置、前田と呼ばれる中央の水田を外敵から守るかたちをつくっている。集落の入り口（北東）には鎮守の社が配されて集落の境界域を形成。前田の水田継続が水系に秩序付られた環状の景観を守る。
栃木県	徳次郎町西根		位置 徳次郎町西根集落……田川上流右岸沿いの沖積地とそれに続く低台地及び丘陵地に位置する。	町並（町家）の表構え	敷地内の家屋（主屋・離れ・土蔵・納屋）はほとんどが切妻平屋建て平入り、一部に二階建て入母屋造りの構えも見られる。塙、土蔵や納屋などと、一部の主屋は石造（徳次郎石）である。石造りの小屋には石瓦の使用もみられる。	町並みの特徴	大谷石の産地として知られる、宇都宮市郊外の大谷地区周辺では大谷石で作られた建物が数多く見られる。とくに、ここ西根集落では東西に抜ける道の両側に沿って徳次郎石の白く柔かいテクスチャーを生かした小規模であるが魅力的な町並みが続く。そのほとんどが農家で、大きな敷地を取り囲むように巡らした大谷石の低い塙、その塙と一体化した土蔵が道路際に建ち並び町並みの連続を際立たせたものとしている。
滋賀県	醒ヶ井		位置 醒ヶ井宿……天野川が北を還流し、西部に至り黒田川・丹生川と合流する地。	町並（町家）の表構え	街道に沿って切妻平入り、厨子造りに手を入れた低い瓦葺き二階建ての家屋が今も連なるが、格子や虫籠窓の伝統的な構え迄備えた者は僅かである。	町並みの特徴	醒井宿は、日本武尊伝説に因む「居屋の清水」を水源とする地蔵川の清流が美しい宿場町。十王水、西行水、武尊腰掛石、武尊鞍掛石、蟹石、影向石それぞれにまつわる伝説が伝えられている。往時を偲ばせる家並みは僅かな気配を残すのみで、伝統的な町並み空間は醒ヶ井に住む人の生活用水としてさまざまな場面で重要な役割を果たしている水場と水辺の景観といえる。
福井県	熊川宿		位置 上中町熊川宿……若狭と近江の結節点に位置し、若狭側、北川上川流域の山間部。	町並（町家）の表構え	瓦葺きの平入と妻入の建物に茅葺きの家屋が混じる家並みである。中ノ町は道幅が最も広く、正面の塗籠の壁と格子、駒つなぎや煙出しや“がたり”（床几）を残す平入の店が並ぶ。	町並みの特徴	熊川宿の町並みは、街道に沿って延長約1.1km。若狭側から“まがり”までの約300mを下ノ町、“まがり”から中条橋までの約350mを中ノ町、東の端までの約450mを上ノ町の3つの区域からなる。街道に並行して流れる用水路（前川）は生活用水ばかりでなく、特に大きな弧を描いて緩やかな坂となっている中ノ町では、軒の重なりと、心地よい水音を伴う前川の流れにより一層の潤いや彩りを添えて景観を印象づける。
徳島県	出羽島		位置 出羽島……海部郡牟岐町沖の島。牟岐漁港の真南に位置。	町並（町家）の表構え	「ぶっちょう」造りの間口と奥行き狭い平屋、瓦葺き切妻造りの表構え、外壁は板張り。「ぶっちょう」は上部は都戸、下は縁台で「ぶったり」と呼ばれる寝殿造りの揚げ都戸を原型とする外壁に取納することができる上下二枚の板戸のこと。	町並みの特徴	島の大きさは、南北が982m、東西625m空豆にそっくりなかたちをしている。港のある湾は東西に長く、港口は北端に開き、入江の奥東北の隅に連絡船の船着き場と出羽神社がある。湾に沿って中心道路（4m未満）が通り両側に間口狭く奥行き浅い切妻平入りの家屋が並ぶ。湾の後背地は海外に向かっての微高の地形をみせる。複雑な角度で折れ曲がる階段と裏路地が背後の狭い宅地と表道とを結び漁村独特の景観をつくる。
沖縄県	竹富島		位置 竹富島……石垣島の南西海上約6kmに位置。八重山諸島の一つ。隆起珊瑚の石灰岩の島。面積5.4km ² 周囲9.15km最高標高20.5m。	町並（町家）の表構え	母屋（フーヤ）と炊事棟（トーヤ）共に木造（貴重造）平屋建て、琉球赤瓦葺漆喰塗、寄棟屋根、外壁は木板張り、木製雨戸の外壁、軒の深さと低さを支える丸木の列柱、野面積みの石垣などにより特徴的な竹富の集落景観をつくり出す。	町並みの特徴	集落内の街路は、島の地形に沿って配置した有機的な格子街路で区画されている。街路に南面しおよそ150～200坪の広さ、周囲を琉球石灰石を野面積みにした石垣（1.4～1.5m）で取り囲まれた屋敷地の中心に、居住部分のフーヤ、西にトーヤを直交配置。フーヤの前後には前庭と畑、これらを取り囲む福木の屋敷林。南面した屋敷の入口には、屏風状の「ヒンブン」が設けられ、屋敷内外の空間との間をとりもっている。

【参考文献・資料】『角川日本地名大辞典』角川書店、『日本民家語彙解説辞典』日本建築学会民家語彙集録部会編纂・紀伊国屋書店、『写真で見える民家大辞典』日本民族学会編・柏書房、『民家と町なみ』稲垣栄三責任編集・世界文化社、『別冊太陽・日本の町並み1（近畿・東海・北陸）』三沢博昭・小野吉彦監修・平凡社、『別冊太陽・日本の町並み2（中国・四国・九州・沖縄）』三沢博昭・西川幸夫監修・平凡社、『別冊太陽・日本の町並み3（関東・甲信越・東北・北海道）』三沢博昭・西川幸夫監修・平凡社、『別冊太陽・京都 古地図散歩』構成・伊東宗裕・平凡社、『榎川村教育委員会編・『榎川文化財散歩』、榎川村教育委員会編、『続探訪・奈良井宿・中国地方のまち並み』日本建築学会中国支部・中国地方まち並み研究会編著・中国新聞、『土佐の民家』高知新聞社編集局学芸部編・高知新聞社、『竹原市伝統的建造物群調査報告書』竹原市、『町家点描』藤島支治郎・藤島幸彦・学芸出版、『町家探訪』藤島支治郎・他著・学芸出版、『風土の意匠』・浅野平八著・学芸出版社、『妻籠宿』小寺武久著・中央公論美術出版社、『京都・建築と町並みの遺伝子』山本良介著・建築資料研究社、『京町家・千年の歩み』高橋康夫著・学芸出版社、『蔵』高井潔著・淡交社、『瀬戸内の町並み』谷沢明著・未來社、『日本の町なみデザイン』益田史男著・グラフィック社、『日本 町の風景学』内藤 昌著・草思社、『沖縄の土木遺産』沖縄の土木遺産編集委員会編（社）沖縄建設弘済会、『日本の都市空間における環境デザインの現状とその比較研究』吉原卓男・塚本学院教育研究補助費、『環境デザインの地域的特性を造形との関連性において考察する』吉原卓男・塚本学院教育研究補助費、表象としての「町並み」吉原卓男・大阪芸術大学紀要紀要（芸術）28、他。